
遠い日の約束

香澄かざな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠い日の約束

【Nコード】

N9432A

【作者名】

香澄かざな

【あらすじ】

現実はその甘くはない。……と見せかけて？

現実はその甘くない。

よく耳にはするけれど、本当に甘くない。

『絶対忘れないから』当時はそう言っていて、時がたつにつれて忘れてしまう。それを咎めることは誰にもできない。人は忘れていく生き物だから。

「休んでる暇があったらちゃんとあやす！」

——なんてカッコつけててもしょうがない。

「ほーら。高いたかい！」

妻に促されて慌てて子供をあやす。ほら。結局こんなもんさ。

付き合うようになって結婚して。初めの頃は新婚ムードがただよっていたものの、時間がたつにつれ、そんな雰囲気はどこへやら。

子供ができたらさらにそんな事とは縁遠く。久しぶりに早く家に帰ってきたらこれだ。

あの頃が懐かしい。二人して『あーん』とかやってたんだ。それが今じゃどうだ。そんな素振りは全くなし。

でも今日だけはそんなわけにはいかない。なんたって今日は特別な日なのだから。

「あのさ」

子供をベッドに寝かせた後咳払いを一つ。つつつと彼女の後ろに立つ。

「何？」

台所に立つ彼女は俺の方なんか見向きもしない。その方が好都合と言えば好都合だけど、それはそれで悲しいものがある。

「これ覚えてる？」

そう言って見せたのは右手。

「手がどうかしたの？」

「違う。見てほしいのはこっち」

右手、正確には小指を彼女の前に突きつける。さすがにこれならわかるだろ。

包丁を持っている手を止め見つめ合うこと数分。

「ささくれができてるわね。男の人でもちゃんと手入れしたほうがいいわよ?」

「……もういいです」

「すぐごと子供の元に戻る。もう、いいや。きっと記憶になんかこれっぽっちも残っちゃいないんだ。」

「お前の母さんは薄情だよなー」

なんてことを言ってみても眠っている子供にはまるで意味がない。所詮お前もあいつの子か。

トントントン、と包丁の音だけが部屋に響く。

「今日だったわよね」

「何が?」

子供の頬をつつきながら今度は俺が聞き返す。

「結婚記念日は二人きりで祝おうって。約束してたじゃない」

ぐるっとふりかえると、そこには料理を手にした妻の姿があった。

「いくつになってもこの日のことは忘れないって無理矢理指きりさせられたもの。忘れられるわけないでしょ」

そこにはいつもと変わらない表情で告げる妻の姿があった。

「三人になっちゃったわね。でもそれはそれでいいでしょ。にぎやかな方が楽しいから」

テーブルにはたくさんのご馳走。今までつくっていたのはこれだったのか。

「指きりじゃなかったの?」

「……いや、そーだけど」

小首をかしげる彼女に小さく一つうなずく。

なんだ。ちゃんと覚えてるじゃねーか。表情変わらないからわかりにくかったぞ。

「まどか」

「だから何」

振り向きざまにぎゅっと抱きしめる。片手には花束。この日のために準備しておいたもの。

「俺、お前と結婚できてよかった」

「はいはい」

さっきのは訂正。現実はいささか甘いかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9432a/>

遠い日の約束

2011年5月12日01時22分発行